



TITLE:

『対話』試論：ジャン・ジャック迫害の陰謀組織というルソーのイメージについての考察

AUTHOR(S):

竹内, 成明

CITATION:

竹内, 成明. 『対話』試論：ジャン・ジャック迫害の陰謀組織というルソーのイメージについての考察. Francia 1961, 5: 9-25

ISSUE DATE:

1961-12-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/137476>

RIGHT:

『対話』試論

——ジャン・ジャック迫害の陰謀組織という

ルソーのイメージについての考察——

竹 内 成 明

まえがき

これは単なる試論であるにすぎない。後述するように、最近の研究によつてルソーの被害妄想が病的な *folie* としてのみ片付けられる性質のものではないことを知り、それなら『対話』をどのような角度から読みなおすことができるか、その視点を求めようと試みたものである。

現在まで、文学史の中でも作品それ自体としても大きな価値を与えられてきた他のルソーの作品に比して、『対話』だけは不当に無視されてきた。ルソーは一七七二年この被害妄想にみちた作品を書き始めた。⁽¹⁾ いやむしろ、これはまったく妄想の産物であるといつてもよいだろう。⁽²⁾ この作品はルソーの精神生活における錯乱を探究しようとする医者や心理学者に特に興味を持てるものである。⁽³⁾ これらの見解は、第一にこの時期におけるルソーを純粹に病理学的な見地から被害妄想患者とみたて第二に精神錯乱に冒された著作は

論ずるに足りぬという論理を無条件に採用することによつて、成り立っていると考えられよう。ところで、アンチ・ルソーイストであるセイエールは、同じくルソーを病者と断定しながら、『対話』にルソーのもつとも本質的な面——神秘的メシア——が現れていると見た。⁽³⁾ それは、ルソーイスト達の第二の論理のかわりに、精神の危機の瞬間にその人の思想がもつとも先鋭的にあらわれるという論理を採用したからにはかならない。どちらの論理をとるべきかは、これらの論理からだけでは判断できない。論理以前の態度決定——『対話』にそれぞれのルソー観に有利な材料を求めうるかいなか——によつてそれは左右されうる。従つてそれらの論理は方便であり、我々としてはそれらを採用するわけにはいかない。

ロベール・オスモンRobert Osmontの議論は、以上の見解にその発想法からの変更を求めるものであった。彼は、まず『対話』の背景の実証的な研究から、当時ルソーが妄想したような *complicité* は存在しなかったが、たしかに事実としてルソーの敵対者の間に *ententes* あるいは

coalitionがあつたこと、そしてルソーがまずそれを怖れていたことを確めた上で、その ententes を complot と考えてしまったところのみにルソーの folie を認めた。しかし、それはもはや folie とは言い難い。オスモンがルソーのこの飛躍に見たものは、『人間不平等起源論』などにおけるのと同じ精神の働きであり（事実から出発して仮説である原始社会というイメージに至る）、そのことからオスモンは『対話』の中にも弁証法的な理性の働きを発見するということになったのである。

オスモンのこの結論に私もまた賛成したい。具体個別的な ententes を普遍的な complot に統合するものは、そこに何らかの志向を認めることができるにせよ、理性の働きであると充分に考えられる。現実の世界からそれを抽象してイデアの世界を構築したプラトンを誰も狂人とは言わないだろう。ただし、『対話』の中に『不平等起源論』の弁証法を見出したからと言って、それだけで『対話』に『不平等起源論』が持っているのと同じ意義を与えることはできない。『不平等起源論』に価値があつたのは、ルソーが同時代の社会的腐敗を単に現象的に見て慨歎しただけでなく、原始社会のイメージをつくりだすことによって、その病根を歴史的に探りえたこと、原始社会以後の階級社会の発生を初めて指摘しえたこと、従つてつくりだされたイメージが楽園化されていたとは言え単なる幻想ではなく、社会的腐敗の根元を衝くシンボルとなりえたことにある。それなら、『対話』において原始社会のイメージにあたるべきジャン・ジャック迫害大陰謀団のイメージは、どういうことになるのか？ それは、はたして単なる幻想から逃れうるものなのか？ 逃れうるとすれば、その理由は？

ジャン・ゲーノにすばらしい発見がある。私は、自分いかなる罪で告発されているのか知らない被告だ。……私を裁こうとしているのはいったいかなる権力なのか？ これはジャン・ジャックのセリフではなく、カフカの『審判』の一節である。あまりの類似に驚かざるをえない。しかし、驚きのあとにたくさん謎が残る。誰が裁くのか何故裁かれるかわからずしかもそれから逃れられない正体不明のこの法廷に、超越者、神の意志を認めるべきか、あるいは現代社会の不条理な機構の巨大な意志を認めるべきか？ いずれにせよ、そういったことがらとジャン・ジャック迫害の陰謀のイメージとどこまで親近性を求めることができるのか？ あるいは、『審判』そのものを、そういったものに弄ばれそれから疎外された人間実存の姿を示す以外、明確な解釈を許さないものとするなら、『対話』もまた解釈を許さぬものなのか？ 正体不明の陰謀に弄ばれるあわれなジャン・ジャックの魂を見るだけにしておくべきか？ ここで、性急な比較論を展開するのは無益なことであろう。我々は今後もこれ以外のカフカの類似を発見することになる。しかし、類似は類似として注目するにとどめ、そこにちやみに意味を求めないことにしたい。『対話』の解釈はまず『対話』にあたることから始めなければならないだろう。

註 1 桑原武夫編・ルソー研究・岩波・P.389.

註 2 D. Norret, Rousseau, Hatier-Boivin, P.167.

註 3 E. Seillière, J. J. Rousseau, Garnier Frères, pp.

403—427.

註 4 OE. C., Introduction par R. Osmond, pp. XLV-LXXII

註 5 J. Guéneno, Jean-Jacques, Gallimard, P.277.

1 『対話』の目的について

いったい、ルソーは何を目的としてこの厄介な『対話』を書いたのか？ 一般にそれは自己の生と思想との弁護にあつたと言われ、ルソー自身もそう言う。だがこれは答にならない。すでに『告白』を書いたのに、いや書き終つたばかりであつたのに、何故再度の弁護を必要としたのか？

『対話』の序文にあたる「この作品の主題と形式について」によれば、ルソーの関心はもつぱら陰謀の真相とその目的とその首謀者達とを明らかにすることにあつたと読みとれる。彼はまた自分の手で『対話』のロンドン草稿に次のような目次をつけた。《第一の対話——公衆の賛同のもとに政府が採用しているジャン・ジャックに対する行動の組織について。第二の対話——ジャン・ジャックの性質と習慣について。第三の対話——彼の著書の精神について、並びに結論》そして、結論の部分で再び陰謀組織について語り、それを告発していることから考えて、彼が自己の生と思想との弁護を意図しながらも、『対話』の目的としては特に陰謀組織の暴露と告発に重点をおいていたと断定してもよさそうに思われる。

しかしながら、ここで簡単に自己の生と思想との弁護という意図を無視してしまうこともできない。『対話』の内容を量的にとらえてみると、むしろこの方が大きな比重を占めてくる。セイエールなどは次のような副題をつけているほどだ。《第一の対話——ロマン主義的心理学とモラルの主張。第二の対話——世俗的静寂主義。第三の対話——ジャン・ジャック、本性善のメシアと自称。》おそろく、こういった側面、ルソーが特に自己の生と思想の中でも自己の

善性と善人のモラルとを強調したという側面は、陰謀組織の暴露という目的に積極的に参与するものであつたにちがいない。それとこれといわば表裏一体をなすものであつたと考えてもほばまちがいないだろう。

ところで、以上のように考えると、まだ一つ疑問が残る。

ルソーが始めて陰謀のイメージを抱くのは一七六八年十一月九日のこととされているが、それは『告白』執筆中、しかもまだその第二部を書き始めていない時のことになる。そしてルソーはその第二部の冒頭で次のように書いているのだ。《心にもなく語ることをよぎなくされた上に、私は身をかくし、人目をくまらず工夫をしなればならない。……私がいる部屋の天井には眼があり、私をとりまく壁には耳がある。悪意に満ちて一ときも眼を離さないスパイや見張りに取り囲まれ、気のおちつかない私は急いできれぎれの教語をなぐり書く。……私のまわりに大仕掛な障壁を絶えず積み上げながらも、なおどこかの裂け目から真実が洩れ出はしないかと、いつも彼等が気にかけているのを私は知っている。》ここにはすでに陰謀のイメージが、イメージとしてあざやかに描き出されており、従つて、ルソーは『告白』第二部ですでに、張りめぐらされた陰謀組織に対して、自己の真実を守り弁護することを目的としていたと考えられる。しかも、彼は第二部の執筆過程の中で、特に註を加えることによつて、陰謀の実体を明らかにしようとつとめているのだ。そうでありながら、何故再度同じことを目的として『対話』を書かなければならなかつたのか？

考えられることとしては、一つには時間的な問題、二つには方法論上の問題がある。『告白』第二部をひととおり書きおえながら

も、註によってなお陰謀の実体を明らかにしようとしたということ
は、陰謀の問題がまだルソーの日々の問題であつたこと、確信と疑
いの間を往復しながら次第に個々の現象から統一的なイメージにま
で高めていくさなかにあつたことを示すと考えられる。その高まり
の中で『対話』が日程に上つてきたにちがいない。『告白』完成の
年、一七七〇年の終りから翌七一年にかけて、ルソーはしばしばパ
リのサロンで『告白』の朗読を行い、陰謀を訴え自己の無実を明
らかにし人々との新しい関係を求めようと試みるが、完全な黙殺に
出合う。おそらくそれが転機となつて、『告白』を捨て『対話』を
始めることになつたのであらう。しかし、その時、ルソーは『告
白』の方法をも捨てたのであつた。

『告白』第一部の意図がどこにあつたかはいろいろ問題がある
が、その方法は疑いなく自己を客観的に描き出すことであつた。第
二部でもそれは受けつがれる。《私の告白の本来の目的は、これま
でのあらゆる境遇における私の内部を正確に知らしめることであ
る。……(従つて第二部でも)今までそうしてきたように、自我の
内部へたち返るだけで充分なのだ。》この自我の内部へもどらうと
いう方法と、この時期にルソーを支配していた陰謀の実体を明らか
にしたいという欲求とが、どこかで矛盾しあつたのではなからう
か? 註という形で陰謀を暴露し訴えようとしたということも、
『告白』の方法のみでは陰謀を明らかにするところまで行けず、や
むなくそれに頼らざるをえなかつたことを示すものではなからうか
?、実際、『告白』第二部では、自我の客観的描写という方法がな
しくずしに無視されていく。第一部で《私の魂をあらゆる見地から
読者に示し(現在の私をもちし) 最初の原因をできるだけ広く

展開する》とされていた方法論が、第二部八巻で《私の告白は多く
の人々についての告白と必然的に結びついている。だから私に關す
ることならすべて私のものも卒直に告白する。》と拡張された
時、それは《非道な敵》が事実を隠蔽しようとしているのに対する
ための方法となつたのであり、さらに同十一巻に至るとその内容は
完全にすりかえられて、《事実の隠された原因を探る場合、その事
実の叙述においてささいな事情が主要な意味を持つ。(従つて)思
いだせるかぎりのすべての事情を展開する。》と言つても、隠され
た原因とは魂の奥底を示すものではなく《陰謀の動機と真因》を指
すことになつてしまふ。そして、このように方法がその対象をすり
かえてきたにもかかわらず、《陰謀から陰謀へ、作因から作因へ》と
さかのぼり、一切の首謀者に至らう》としても《そこへ行くまでの
地下の暗い曲りくねつた道で踏み迷つてしまふ》と自ら言うよう
に、陰謀の実体を明らかにすることができない。『告白』の方法
は、その対象がすりかえられねじ曲げられてきたにもかかわらず、
この時期におけるルソーの強い内的欲求に適合することができなかつたのだ。方法自体が根本的に変更されなければならなかつた。そ
れはもはや時間の問題だつた。人々による『告白』朗読の黙殺がそ
れに機会を与えるだろう。だが、『告白』の方法の否定は何を意味
し、ルソーは『対話』で何をなそうと欲するののか?

註1 その代表的見解として Ph. Van Tieghem, Histoire

de la littérature française, Fayard, P. 504.

註2 OE. C., Dialogues, P. 661.

註3 OE. C., Notes et variantes, P. 1615.

註 4 E. Seilliere, op. cit., p.458.

註 5 OE. C., Introduction par R. Osmont, P. XLVI.

註 6 OE. C., Confessions, PP. 364, 372, 389, 398, 455,

472, 493, 508, 527, 540, 542, 561, 565, 631, 638;

Notes et Variantes, P.1482 の各原註参照

註 7 OE. C., Confessions, P.656. etc. Notes et Variantes, PP.1611—1614.

註 8 OE. C., Confessions, PP.175, 400, 587, 588, 589, 590.

2 方法の問題

アランによれば、『告白』は近代小説の条件をすべてそなえており、『告白』はその先駆的役割を果たしたものであった。その意味は、ルソーは『告白』の中で単に自我の内部へたち返っただけでなく、自我を取り巻く世界、人間関係、状況を描き出すことによって、自我の内部を浮き彫りにすることに成功したということである。『告白』に見られるジャン・ジャック像は、自我の内部と自我を取りまく状況との相互の關係づけあいによって生みだされたものであり、その方法を意識的に採用することによって、ルソーは近代小説の方法を確立したのであった。

そして、それにもかかわらず、つまり人間関係や状況を描き出すことに成功しながら、陰謀の実体を明らかにすることはできなかった。何故か？ 不思議なことに、カフカも『審判』を書く時、それまでの文学的成果であったはずの近代小説の方法を否定することか

ら出発したのだった。ルソーは近代小説が生まれる以前にその方法を獲得しながら、それを捨てた。それはもちろんカフカのように意識的な否定ではなかったらう。だがとにかくその方法ではできなかった。その目的を、ごく大まかに言って、人間の内部と外的世界の触れあいによってその人間像を客観的に描き出し、そうすることによって現実のリアリスチックな再現をもたすことにあると考えるなら、ルソーがその方法を捨てた理由も、その目的、つまり自己の像を描き陰謀組織に迫害されている姿をリアリスチックに再現するという目的を、放棄したことにあるとは言えないだろうか？、言いかえれば、『対話』を書こうとした時、彼は始めから陰謀という現実の再現をあきらめ、それではない別のことを狙っていたということになる。

ところで、ルソーは対話形式を採用した理由として、彼自身としては、次のように説明している。△対話形式は、私にとつて、ことの当否を論ずる上にもっとも適当なものと思われたので、それを採用することにした。▽

何の当否を論ずるといふのか？、表題は『ルソーがジャン・ジャックを裁く』ということになっているが、論議の対象となるものはジャン・ジャックではなく、ジャン・ジャックを裁いている者、その裁きかた、裁きの論理が、裁かれることになる。作中人物「ルソー」はジャン・ジャックの弁護人ではない。「フランス人」は最初《nos messieurs》(Philosophesのこと)の代弁人としてあらわれるが、後には彼等の批判者となる。言いかえれば、二人が協力してジャン・ジャックに対して企てられた陰謀の当否を論ずるということになるわけだ。

しかし、それだけではない。ルソーの次の言葉は注目し値する。

△（私を取りまいて）深いしかも普遍的な沈黙は……その奇怪な状況を説明しうるいかなる考えも、私に思いつかせてはくれなかった。……（沈黙の謎を解こうとする）私の労苦もすべて私を満足させてくれず、結局、私に残された唯一の方策を取るしかしかなかった。それは、私の知らないまた私には理解することのできない個々の動機について推論することは不可能なので、それらの個々の動機を統合しうる一般的な仮説について推論することであった。△彼は具体的な彼の敵対者達が持つ個々の動機を捨てて。彼はそれを知ることができなかったからだ。そのかわり、彼等にかわって彼が、自分を迫害する陰謀の動機を仮説としてつくりあげる。その動機によってまず自分を迫害の対象とし、そうしておいて迫害された自分のために「ルソー」と「フランス人」を登場させるというわけだ。

むろん、これは論理としてはために近い。具体的な動機を知ることができないからと言って、自分で勝手に理由をでっちあげる論理的な必然はどこにもない。それは、何らかの必要にもとずいて、ためにすることである。

しかし、これで、ルソーが何故近代小説の方法を捨てたか、その理由はいちおう納得できることになる。彼は陰謀の実体に触れることができなかった。彼を取り巻く組織、つまり外的世界を描ききることができなかったのだ。ところが、彼はそれにもかかわらず陰謀をあくまで自分の手で構成しようと欲する。何故そうしなければならなかったのか？ 何らかの必要があったことは確かだろうが、今度はそれを、陰謀の実体を暴露することであったと言うわけにはい

かない。陰謀はそう見えてもルソー自身にとつても実はありえないことかもしれないのだ。それにもかかわらず陰謀を構成しようとする。それなら、陰謀のイメージは何か別のものの枠組となるものではなかったか？ イメージは鋳型であり、それに流しこまれるべき何か、あるいはイメージに仮託されることによってしか表現しえない何かがあった。それは見えないものでありながら存在するものであり、その何かわからないものがルソーを怖れさせ、何らかの形で表現へと向かわせたのではなからうか？

事実、ルソーは怖れていた。彼を取り巻く△深いしかも普遍的な沈黙△を現実の中で何よりも強く怖れていた。△私は貴方に私の気持を偽らさずにお伝えしますから、貴方も、私についてどう思っているかしらるか、包まずに貴方の気持をお示し下さい。（デュソーへの手紙・七一年二月）△△もつともお喋りな国民の中にあつて、私は啞の国民の中にいるかのように毎日を過さねばならないのではありませんか。（サン・ジェルマンへの手紙・七〇年二月）△△白昼の光の中では何ものも私をおどろかせません。けれども、私を取り巻く闇の中ではすべてが私をおびえさせるのです。（ペロワへの手紙・七〇年三月）△△現実の日々の生活の中で、ルソーが実際に感じたものは、この沈黙の闇だけであつた。

沈黙を感ずるとは、主体の側からのある働きかけの意志なしにありうることではない。それは、人々の無関心の中に置かれながら、自分のみは眼覚めている状態をあらわす。それは、闇の中で覚めている感覚であり、突然今まではちがった見知らぬ世界の中に自分一人がいることに気がつくことである。そうといった感覚は、さめて

いることのおびえ、あるいは一人であることの不安をつくりだす。それをごく一般的に実存の不安と言いかえてもさしつかえないだろう。むしろルソーはそんな概念で自分のおびえを意識していたとは考えられない。意識できれば、彼も『審判』を書いたかもしれないだろう。しかし、それを意識できなかったが故に、ルソーはおびえのあたりまえな対象をつくりだすことになった。つまり、沈黙におびえていると意識するかわりに、自分がおびえても、当然な対象におびえることの方を選んだ。闇におびえることよりも、その中にあるはずのことからにおびえることになった。沈黙を無理にでも解説し、そこに自分の全存在をおびやかすもの、自己の思想もモラルもすべて抹殺しようとする意志を見つけたすことを選んだ。ルソーはそれを『対話』における自己の方法論としたのである。

かくして、実感であった沈黙の闇が、無理に読み取られた陰謀組織のつくりだす目的的なものとなる。ルソーの意識の中で、沈黙の闇は、そこにあるものではなく、組織的に彼に向けられたものとなり、最初の沈黙のなまなましきよりも、つくられた沈黙という人為性の勝つたものとなる。そのために、この深いしかも普遍的な沈黙（実感）は、それが覆っている秘密、十四年来私に隠されている秘密（人為）に劣らず理解しがたいものであった。④という現実と仮構とが一つになった表現が生まれる。ルソーにはもはや両者を識別することができず、すべてが十四年来彼に向けて企てられてきた陰謀の結果に見えてくるのだ。ただし、後述するように、それだけの条件が現実の中にはあった。

沈黙の怖れがこのように怖れても当然なものへと、その対象を転化したとしても、その対象がカフカの法廷ではなく、何故陰謀でな

ければならなかったか？ それは、この転化の過程が、同時に自分を犠牲者としてとらえることでもあったことによって説明される。人々が自分を背徳者、偽善者、世を毒する者とみなし、その存在を抹殺しようとしているという恐怖は、同時に自分こそが殉教者であるという安心にも転化されるものである。自分を背徳、演神の罪、あるいは人心騒乱の罪で誹謗されているとみなすことは、自分をキリストの後を追う者とみなすことに等しい。セイエールがルソーを『自称メシア』と断定したのは理由のあることだったのであり、ルソーは、一方で陰謀を構成せざるをえなかったとすれば、他方では同時にその手で自らの福音書も書きあげざるをえなかったのである。かくして、なまなましい沈黙のおびえは、ある甘さを持つことになり、当初の鋭さをなくしてしまう。老いた魂にとって、陰謀のイメージはつくられねばならぬふしど、だったのであり、彼はそこで夢想を待つことになる。

註1 Alain, *Propos de littérature*, chap. LXXVII.

註2 前章の終りで述べたように、ルソーは『告白』の第二部では、明らかにそのことを成功させようと欲していた。

註3 OE. C., *Dialogues*, P. 663.

註4 C. G., txx, P. 317; t. xix, P. 248; t. xix, P. 291.

なお、一七七〇年以後のルソーの手紙にはこういった訴えが各所に見られる。cf. OE. C., *Notes et Variantes*, P. 1616.

3. 陰謀とは何か？ (1)

このように、ジャン・ジャック迫害の陰謀は、ルソーにとつてた
めに必要とされたイメージであつた。それは、そのために、カフカ
におけるような沈黙自体の不安の表現とはなりえないであろう。し
かし、彼の努力、沈黙を無理にでも解説し、イメージを現実⁽¹⁾に押し
つけることによってそれを現実⁽¹⁾に還元させようとした彼の努力は、
決して無駄なものではなかつた。

むしろ、こういった解説のしかたは、ルソーが具体的現象的なこ
とがらにかかわればかわるほど、なにごとであれあくまで不当な
迫害陰謀の一環に組み入れられねばならないのだから、それだけよ
けいに実際の事情から逸脱し、妄想と言われるに値するでたらめな
解釈を生み出すのは言うまでもない。ところが、彼が、より恒常的
な、あるいはより抽象的な、現実を形づくる諸関係の解釈に入る
と、その解説のしかたは現実を反映し、そのイメージは現実⁽¹⁾に現わ
れている、以上の真実を伝えるものとなる。そして、それに支えられ
て、事実をねじ曲げていたはずの解釈が、今度は、言わば象徴的な
真実、*déformation* による真実と呼ばれるものになりうるのだ。

この過程は、彼のイメージの基本的な核となるものであると同時に
に、具体的現象的な事情を含む解説のしかたから、考察されなけれ
ばならないだろう。

この場合、彼のイメージの核となるものとは、(1) *Philosophes* の
彼に対する敵意——彼の名声をおとしめ、彼をペテン師、極悪人と
して、その思想とモラルを含む全存在を抹殺すること、(2) 彼等と政
府との結びつきから民衆の協力に至る全国民的な彼に対する組織的

統一行動——彼をすべての社会から切り離し、そこで彼に対して何
が行われているかわからぬよう彼を《闇の壁》の中に《隔離》する
こと、以上の二つであるが、それらは互いに関係しあつて全体のイ
メージを構成することになる。

まず、*Philosophes* の彼に対する敵意から見よう。例えば、ルソ
ーの被害妄想の著しい例としてしばしばあげられることに、次のよ
うな事件がある。彼によれば、*Philosophes* は彼に弁明の機会や
手段を与えることを怖れ、手先きを使って、インキのかわりに《ど
うにか薄く色づいている水、しかも書けばその色もすぐに消えてし
まうような水》を提供したというのだ。実際に、どのようにしてか
はわからないが、非常に粗悪なインキが彼の手に渡つたことは確か
であり、事実、『告白』の草稿の一部に《殆んど白いインキ》で書
かれた跡が残っているらしい。しかしそれを *Philosophes* の仕業
と解したのは、明らかにルソーの事実のねじ曲げである。何でもな
い現象を無理に陰謀のせいにしなければならなかつたことの結果に
はかならない。だが、《(彼等は)特に彼のペンの鋭さを恐れ、……
彼の名誉を守るいかなる手段も残そうしなかつた》と彼が書いた
時、それはもはや事実のねじ曲げではなく、真実を告げる表現とな
る。彼等⁽²⁾は実際に『告白』が書かれることを欲していなかつた。彼
等と彼との争いで、彼のみが一方的に争いの裁判官となるような著
作は、彼等にとって許せるものではなかつた。デビネー夫人は警視
總監サルチエヌの介入を要請し、『告白』の朗読を中止させてしま
う。また、彼等は『デビネー夫人のメモワール』を公刊し、『告
白』の真実を疑わしいものとする。両者は同じ争いについて語りな
がら、今でも二つの真実であり、どちらに信憑性があるか判断に苦

しまされるほどののだ。それこそルソーが怖れたことであり、その怖れを彼等は巧みに嘘をでっちあげ、彼の生涯を歪曲し、彼の『告白』が嘘に満ちているかの様に思わせた」と表現する時、それはまさしく現実を反映していたことになる。さらに、彼等は、彼が自分の気持を無理強いしてあえてした告白から、卒直であることの価値まで奪ってしまうよう企むのだ」と彼が書く時、それは、現実にはまだ無いことでありながら、必然的に起りうることを表現したさきを読みとつた言葉となるのだ。デイドロはルソーの死後、この狡猾な極悪人は、(誠実な人々に対する)不当にして残酷きわまりない中傷にいくばくかの真実らしきを与えるために、まず自ら自身を醜惡な色どりで描いて見せておくのだ」と書く。このように、彼等の彼に対する敵意、彼の真実を何らかの形で打ちくたそうとする彼等の意志は、たしかに現実に行動となつて彼に向けられていたのであり、ルソーが必要とした怖れは、まずここで現実と出会うことになる。そして、何でもない一つの現象が、たとえ事実をねじ曲げて表現されようと、彼に向けられた意志への恐怖としてそれが表現されているかぎり、その意志の表現としてそれは虚構の真実となりうるわけだ。

ところで、彼等の敵意を生みだした原因とは何であつたか？ルソーがその疑問を解こうとする時、彼にとつてもその原因は具体的な事実としてつかめなかつたものであるだけに(敵意は結果としてしか彼に与えられない)、彼の解説は、現象を越えて、現象の向こう側にある真実に一層近づくことになる。彼は、その原因を彼等の『嫉妬や恨み』に求めた。つまり彼の言う有害な『amour-propre』のあらわれとしたのである。一見、これもでたらめな妄想と思われ

る。たしかに、歌劇『村の占者』が御前上演された時、自ら多芸を誇つていたデイドロ達がいくらか嫉妬を感じたことは嘘ではなからう。しかし『学問芸術論』の成功には彼等も喜んだはずだ。デイドロ達はそこに旧来の学問芸術に対する痛烈な皮肉を読みとり、共に時代を改革すべき良き仲間として彼を迎え入れたのだった。しかし、彼等と彼との一致も、そして彼の誤解も、そこまでである。ルソーは自分の書いたものをあまりにも大真面目に信じる道をとる。

彼にとつては、すべての学問、特に哲学は、人を墮落させるものとなる。理性と科学を捨て感情と孤独のモラルをたてる。社会を惡の根源とし現実から逃避することを良しとする。理想社会を夢見、人民主権説によつて知らずに革命を準備する者となつてしまふ。理性の力と人智の進歩を信じ、アンシアン・レジームと闘いながら『百科全書』を計画し組織的な啓蒙活動を行い、財産権を国富と民富の基礎とする来たるべき自由の社会に向かつて漸進的な改革運動を展開していたデイドロ達の眼に、ルソーの態度と思想がどう映つたか、今さら述べるまでもないだろう。そして、ルソーが彼等の彼に対する組織行動の始まりを一七五七年に置いた時、それは決定的に正しかつたのだ。その年に『孤独であるものにかぎつて悪人』というデイドロの言葉があらわれる。デイドロには友人ルソーを揶揄するつもりはなかつたとしても、結果としてそれはルソーのモラルに対する宣戦布告になつてしまつていたわけだ。彼は『貴兄等』、哲学者達が、都市の住民だけに自分達の義務がつかつていとお考えになるのはどうもおかしい。田舎にあつてこそ、人類を愛することを学び、人類のためにつくすことを学ばうのです」と応ぜざるをえない。それは、十八世紀の現実の中で現実の改革のために闘う者

と、超時代的な理想の中にしか生きることのできなかつた者との、いかんともなしい葛藤であった。従つてルソーが『対話』で、《孤独であるものにかぎつて悪人》という彼等のモラルに、《悪人は砂漠におらず社会の中にのみいる》という彼のモラルを対置させた時、それはこの葛藤のシンボルとなりえていたわけだ。そして、時代の反動と絶えず闘つていなければならなかつた彼等が、例えば《人民の膏血によつて支払われながら駄弁を弄するのみを業とする無為徒食の連中》などというルソーの言葉を聞いた時、彼の雄弁に對して烈しい憎しみをおぼえたと考えても無理ではあるまい。百科全書という地味な仕事に苦悶しながらその影響力を拡めようとしていた彼等が、恋愛小説で一拳にベストセラーを売り出したルソーに對して、自尊心の焰を燃やしたと考えても全然無理ではなからう。むしろそうであつてこそしかるべきであつた。彼等こそ時代の指導者であらねばならなかつたのだ。

そして、『百科全書』は一七五一年から七二年にかけて一八四名の執筆者によつて完成される。Philosophes は《『百科全書』のおかげで、国全体を自分の思想の擁護の味方に加える》⁽⁸⁾ルソーが陰謀のイメージを抱くのは、彼等の支配力がもつとも強くなろうとする一七六八年であつた。彼のイメージの第二の核も、そこにその現実を見出すことになるだろう。

- 註1 ルソー研究・前掲書・P.389. cf. G. Lanson, *Histoire de la littérature française*, Hachette, P.779.
 註2 OE. C., *Dialogues*, P.717; Notes, P.1646.
 註3 Ibid., *Dialogues*, PP. 693, 716, 903; Notes, PP.1613.

1635, 1712. cf. J. Guéhenno, op.cit., P. 284.

- 註4 OE. C., *Dialogues*, PP.701, 806, 810, 819; Notes, PP. 1637, 1679, 1680.

- 註5 Ibid., *Dialogues*, PP. 662, 714, 734; Notes, PP.1616 1651.

- 註6 Ibid., *Confessions*, PP. 455, 459. CF. C. G. t. I, P.27.

- 註7 OE. C., *Dialogues*, PP. 788 et 789.

- 註8 この一節も次の言葉で始つてゐる。《あなたたの文学者達(Philosophesを指す)が、孤独な人間は全世界にとって不必要だし、社会の中でその義務を果さぬものだと呼ばれつゝむだでゐる》。《(Lettres à Malesherbes) OE.C., Fragments, P. 1143.

- 註9 L. S. Mercier は『新エロイズ』の評判について次のように伝えている。《文学者達は、あたうかぎりこの作品の効果も認めまいとした。》《彼等の芸術観がルソーのそれより先鋭的であつたかどうかは一概に言えないが、彼等がそうであることを誇りにしていたことは無視しえない。ルソー研究・前掲書・P.288. 桑原編・フランス百科全書の研究・岩波・第九章芸術論・D. Mornet, *La Nouvelle Héloïse, Grands écrivains*, I. Introduction, P. 245. マンシュ・ゴロア・平岡他訳・フランス史・新潮文庫・上巻 P.338.

註10

4 陰謀とは何か？ (2)

ルソーは、国民のすべてが彼に対する陰謀に何らかの形で参加していると考えた。例えば、彼は、Philosophes に煽られた民衆が祭りにかこつけて彼を葬人形に仕立て火刑に処して恥づかしめたと言うのである。これも事実をねじ曲げた解釈であったことは言うまでもない。実際は何でもない民衆的な宗教祭典であった。問題は、彼の読みちがいがどのような現実と出会うかということである。

ルソーが《cet accord unanime》という時、その中には《Les gens de lettres, les grands, les visirs, les rois, les mécontents, les financiers, les prêtres, les femmes, le peuple, les Anglais》等が含まれていた。⁽²⁾これらのグループがそれぞれ、の程度までルソーに敵対するものであったが、まず検討されなければならぬのだが、その場合無視できないのは、各グループ間にあった対立、それ以上に各グループ自身の中にあつた対立である。それらの対立がルソーに対する一致団結となりうるものであつたかどうか、言いかえれば、全国民対ルソーの矛盾はそれらの対立を乗り越えうる性質のものであつたか否かが、検討のかなめにならなければならない。ここでは、対立の詳細な分析は不可能なので、一応歴史上知られている対立のみを次に取上げる。

(1) Les gens de lettres (les savants) —— 百科全書派〔穩健派 (ダランベール等) 対急進派 (ディドロ)〕 対 反動派 (フレロン等) 対 非政治派 (クレヴィヨン・フィス等) ② Les grands —— 旧貴族〔反動派対開明派 (リュクサンブール公等)〕 対 新貴族〔反動派 (パリ高等法院中心) 対開明派 (モンテスキウ等)〕 ③ Les visirs ——

反動派対開明派 (シヨアズール等) ④ Les rois, les médecins —— (1) に同じ。 ⑤ Les financiers —— 穩健派。 ⑥ Les prêtres, les femmes, les Anglais —— すべてを含む。 ⑦ Le peuple —— 急進派、無関心派、暴動派。以上であるが、(a) 旧貴族、新貴族、政治家内の反動派は、アンシャン・レジームに自己の利益を有しその擁護を第一とすることによって、文学者内の反動派は、その思想的代弁者として、ともに一致し、他のすべての派を敵対視していた。

(b) 旧、新貴族、政治家内の開明派は、その身分にかかわらず新思想に同感ないし同情的であることによって一致した。また、新貴族の大部分は上層ブルジョアジーの出身であることによって (c) とも一致した。(c) 知識人と徴税官内の穩健派は、上層ブルジョアジーあるいはその思想の代表者であり、封建的特権に依存する面を持っていたために、啓蒙思想の味方あるいは推進者でありながら、時に急進派の思想や行動と対立した。(e) 知識人グループ内の急進派は、新興ブルジョアジーの思想と行動を代表し、あらゆる封建的束縛と偏見に對し闘っていた。民衆内部の急進派は、職人階級の中で百科全書派に共感、あるいはその闘いに参加していた。(e) 非政治派は、政治よりも人間性の開拓者としてその道をきり開いていた。(f) 無関心派は、職人、労働者、農民で、国民の大多数を占めていたが、文盲であり支配者の圧制にただ耐えていた。(g) 暴動派は、盲目的な暴動によって支配者の圧制に抵抗する道を選んだ。

さて、ルソーと百科全書派とを決定的にしかも公的に対立させたものは、穩健派の代表ダランベールが『百科全書』に書いたジュネーヴ論であつた(五七年)。反動派によって『百科全書』が弾圧され、ダランベールが危険を感じて編集者の位置を退いた時(五

九年)、ディドロは、彼はこの場にのぞんで人が期待したようにふるまわなかった。『彼の逃亡の知らせを聞いて反動どもがどんなに喜んだか!』と非難する。しかし、危険さえなくなればいつでも協力したダランベールと(六五年仲直り)、永久に帰ってこなくなった隠遁者ルソーとは、事態は本質的に異なっていた。ディドロの交友尺度は何よりも『百科全書』を基準とするものでなければならなかったのだ。ディドロ達とルソーとのモラルの対立は、ダランベールとの一時的な離反以上に解消しがたいものであった。

次に、開明派についてだが、ルソーがディドロ達と争いエルミターージュを追い出された後、彼を保護したのは、この派のリュクサンブル公であり、後にはコンチ公であった。またシヨアズールの手腕にルソーは始めのうちは賛辞を惜しまなかったし、シヨアズールも彼に好意を示していた。この政治家の彼に対する冷淡さの始まりは、『社会契約論』『エミール』の出版後(六二年)、即ち彼に対する弾圧が始り逮捕状が出された時であった。ところで、この逮捕は奇妙な逮捕であった。リュクサンブル公の知らせによつてルソーは警吏の来る直前に逃げ出した。が、彼は黒服の男達と道で出会い挨拶をかわして通り過ぎる。それが警吏であったというのだ。何故逮捕しなかったのか?、結局逮捕は口実であり、彼を外国へ追いやり、彼の不在中 Philosophes の陰謀が自由に行えるよう、彼等と政府官憲がぐるになってやつたにちがいない。ルソーはそう考えた。もちろんこれも誤説であった。前々年『百科全書』の特許を取消していた反動派が、ルソーを野放ししておくはずはなかった。高等法院―ボンパドゥール夫人―シヨアズールという結びつきが多分シヨアズールを沈黙させたのだらう。しかも当時フランス各地で

暴動が頻発していた。そんな時に暴力革命を肯定するような思想を公刊したルソーに対し、シヨアズールも決して好感を持てなかったであらう。彼は、反動派のなすがまに、ただルソーの身柄だけは安全に亡命できるよう計らつたにちがいないと思われる。ところが、この処置に満足しなかったのが、この派にもっとも近かつたヴォルテールであった。六六年にはダミラヴィルにルソーは少くとも晒し首に値する暴動挑発者ですと書き、トーレスには私はシヨアズール公爵に言つてやりました。ジャン・ジャックがフランスの大臣のように考えられている(尊重されている)のは正当ではありません。彼は『社会契約論』の中で「君主政の中で出世するのは小悪党だけ」(シヨアズールを皮肉る)などと書いているではありませんか。『また翌年にはドラにルソー公爵はルソーの卑劣で犯罪的なやりくちをよく御存知ないようです』と、露骨にシヨアズールをけしかけている。六六・六七年といえ、ルソーはフランスを離れイギリスにいた時である。ここでも彼の誤説はこういつた現実と出合つてゐるわけだ。またリュクサンブル公はルソーが陰謀のイメーヅを抱く以前に死ぬが(六四年)、コンチ公は、政界へ復帰すると同時に(七〇年)ルソーに対して冷淡になる。要するに、彼等開明派は、その政治的利害が許さざりルソーを保護したのであり、その利害が彼の思想と対立することがあらわになるにたがつて、反動派と手を結んでも、ルソーと対立しなければならなかったのだ。

民衆はどうであつたか? かつては彼の『idole』でさえあつた民衆は?、この偶像是文字を読むことができなかった。伝聞によつてしか彼の言葉を聞くことができなかった。それは伝達者の思想と

意志によつて動かされるものであった。そしてもつとも有力で恒常的な伝達者は僧侶であつた。すると何が起るか？、彼がモチエに滞在していた時、モチエの牧師モンモランは説教の中で彼を「憎むべき背教者」と告発する。《するとモチエの教区民達は「背教者、アンチキリスト、ルソーを破門せよ、火烙りにせよ」と叫ぶのです》このあと有名な投石事件がある。民衆は彼が正当に言うとおりの「盲目目的にしてかつ忠実な実行者」であつた。もう一つの有力な伝達者、本を読み理解できる民衆内部の知識人達は何をしていたか？、彼等は現実的な改革のプログラムを持つ百科全書派に期待を寄せていた。あるいは新興ブルジョアジエの思想的代表になりきっていた。彼等には、民衆自身が主権者になれるなどとはとうてい考えられなかつた。彼等のまわりの民衆はあまりにも無知であつた。そして飢えた暴動派も夢想家に用はなかつた。要するに、民衆はパンを獲得し税を免れることのみを欲し、そのために役立つもののみを受け入れていた。彼等がルソーを理解するのは、彼等の革命が日程に上つてからのこととなる。

時代は、新興ブルジョアジエと百科全書派のものであつた。彼等こそが、実力を持つ時代の推進者であつた。『百科全書』は、下は職人階級から上は開明派貴族に至る大幅な期待を集めていた。それは、内部にあつたいくつかの対立や反撓を乗り越えて、時代の進歩的な思想家の殆んどすべてを統一していた。進歩的思想家の中でそれと決定的に対立したのはルソー一人であつた。非政治派は、風俗頹廢のかどでルソーの烈しい攻撃的となつたが、既成秩序に対する批判者として百科全書派には受け入れられた。パリの名高いサロン・デファン夫人、ジョフラン夫人、レスピナス嬢のサロンは、百

科全書派の思想の母体であつた。彼女達は百科全書派を支持し、力を貸してやつた。編集者としてディドロはあらゆる階層の人々の協力を求めねばならなかつた。彼は、一方では職人階級の参加を求め、他方ではすんでポンパドゥル夫人の保護を求めた。政府の官僚達が『百科全書』のたれを計り、執筆さえした。開明派の大臣達は、彼等の利害と一致するすべての啓蒙思想を育成しようとしたが、百科全書派とルソーが対立すると、より穩健で實際的であつた百科全書派の方を支持し、ルソーを見捨てたのは當然だつた。そして、ここに次のような手紙がある。《(コアンデからルソーへ・一七七〇年三月)私の保護者(ネッケル)は貴方にたいし真実に尊敬の念を抱いておられます。もし彼が、貴方を嫌つておられる大臣(ジョアズール)を怖れてさえおられなければ、貴方に友情を示されることでしように……この手紙は焼いて下さい。「永久の秘密」をお願いします。》

従つて、ルソーが『対話』の中で、《人々は、ジャン・ジャックを非難すれば、貴人達の保護……文人達の称賛、そして世間一般の好意を得られることを、また彼を弁護すれば、その身が破滅することを確認している。》と書く時、それはまったくの真実を告げていることになる。百科全書派は、偏狹な反動派と無知な民衆とを別として、《全国民を味方》としていたのであり、『百科全書』は、ルソーがパリから追放されている間に、反動派の十年近い弾圧を巧みにぐぐり抜けて、本文全十七巻の配布を完全に終り(六六年)、勝利への道を歩いていたのだつた。かくして、彼の陰謀のイメージは、その全体性において、現実と出会うこととなる。ルソーは、国全体のすべての階層にとつて、言いかえれば、絶対王政下における

三つの身分にとつて、敵だったのであり、第四身分にとつては、他人であつた。反動派にとつては、許しがたい存在であり、進歩派にとつては、余計なもの、あるいは文字通り邪魔ものであつた。つまり、彼は、すべてのグループからはねのけられ、彼一人の壁の中に「隔離」されねばならなかつたのである。ルソーにとつて、それはまったく「理解」しがたいことであつたが、それは、それが時代の奥底にひそむ意志であつたからであつた。ここで、彼の陰謀のイメージは、時代の意志のシンボルとなる。そして、具体的な事情の一つ一つは事実をねじ曲げて解釈されていたにもかかわらず、いやむしろそれ故に、その解釈は、時代の意志の表現として、虚構の真実となりえていたのだ。

もし彼が、彼の思想のいくつかの面のただ一つの側面でも、他と協力するだけの妥協性を持ちえていたら、陰謀のイメージも不必要であつたかもしれない。だが彼は、自分の思想が全一不可分のものであることに固執した。社会批判も自然思想も民主権論も孤独のモラルも、そしてまた *Philosophes* との対立意識すらも、彼にとつては同じ一つの原理のあらわれでしかなく、それらはいわばこみにして受け取ってもらわねばならなかつたのである。そして、彼が自己の思想の全一性を要求すればするだけ、彼は受け入れがたい存在となり、国民各階層から見捨てられざるをえなかつた。

思想家、特にルソーのような型の思想家は、自己の思想が全人類に役立つものでないかぎり、その思想によつて自己を充足させられない。孤独の中で考察された人民主権の思想は民衆自身の思想とならなければならなかつたし、良心にすべてを委ねるモラルは社会の改善を願うすべての人のモラルとならなければならなかつた。人々

のものとならないのでは、自己の全体を生かしかることにならなかつたのだ。職人の子は人々に使ってもらうためにつくつていた。そして思想家ルソーには、彼の生きている間は、その道がふさがれていた。人類社会から閉め出されることは、同時に自分の思想からも疎外されることであつた。『対話』によつて、彼は自分自身（ジャン・ジャック）を自分の思想の受け取り手（ルソーとフランス人）とするが、この受け取り手は、ジャン・ジャックがかつて持つていた戦闘的な側面を否認し、善人で平穩を愛する孤独者としての側面のみを強調することになる。ルソーは、そうすることによつて、つまり、自ら自己の全体性の一部を排除することによつて、人間への新しい通路を開こうと試みたのだ。『対話』は、人間社会から「隔離」されたルソーの、自己からの疎外の始りであると同時に、人類からの疎外の回復への苦しい試みでもあつたことになる。（この点については、主題が別となるので再論したい。『社会契約論』『エミール』から『孤独な散歩者の夢想』への流れが、このことをテーマとして明らかにされると思う。）

註1 OE, C., *Dialogues*, P. 714; *Notes*, P. 1644.

註2 *Ibid.*, *Dialogues*, PP. 662, 704, 706, 917—926.

註3 フランス百科全書の研究・前掲書・PP. 57, 60. デイドロはヴォルテールにも好感を持たず、あゝの意地悪の異常児に手紙を書かない決心をするが、その三日後には『百科全書』の原稿をもらうためにお世辞たらたらの手紙を書いてゐる。同書・PP. 58, 59, 66, 67.

註4 OE, C., *Dialogues*, PP. 706, 710. cf. *Confessions*.

PP. 582—584; Notes PP. 1638, 1639.

註5

『告白』の中でルソーはリュクサンブール公について公私
の不在(亡命)が彼の愛情を薄めたような気がした。宮廷
人にとっては、権力者の不興を蒙っている人間に対して
同様の愛着を持ち続けることは実にむづかしいことなの
だ。』と書いている。コンチ公については、七〇年以後一
言も言及しない。OE. C., Confessions, PP. 618,
619; Notes, P. 1642.

註6

Ibid., Notes, P. 1592; CF. fragments, P. 1148.

註7

フランス百科全書の研究・前掲書・PP. 13, 14.

註8

この手紙は匿名であって、コアンデという推測はオスモン
に48° OE. C. Introduction, PP. LIV, LV; Dialog-
ues, P. 166.

註9

彼の死後、人々は彼の全一性への固執から解放され、各自
のルソー讃歌が一斉に歌われることになる。だが人々は彼
のすべてを歌ったのではない。『告白』第二部が出版され
た時(一七八九年)、人々はそれが彼の著作であることを
認めなかった。『少しでも彼の文体に通じておれば、ジュ
ネーブの哲学書の筆とはほど遠い悪意のこもった埋草が発
見されるだろう。(ウィム・モンパ、ルソー讃)』A. Mon-
glond, Histoire intérieure du préromantisme fran-
ais, t. I, PP. 293—294.

また、一七五〇—一八〇年間に於ける個人の蔵書目録五〇
〇の中で、『新エロイズ』一六五に対し『社会契約論』
は一でしかない。(ヴォルテールは『アンリヤッド』一八

一『ルイ十四の時代』一六一その他の諸著作一七三。『百
科全書』は八二。) V. L. Saulnier 山田他訳・十八世紀フ
ランス文学・クセジュ・P. 17.

なお、迫害された思想家への好奇心と、その思想を受入
れることは混同されてはならない。この時代の彼への関心
は殆んど前者によるものであった。CF. ルソー研究・前掲
書・P. 237.

註10

この章、特に諸グループの対立についての検討は不十分で
ある。ことに僧族内部の対立については全然触れられなか
った。それと高等法院との関係などがからんできて私には
まだよく理解できない。ただ、ジェジュイット派にも、ジ
ヤンセニスト派にも、また新教徒にとつても、ルソーの宗
教思想は容認しがたい敵であつたことは確かなので、あえ
て突つてまなかつた。CF. ルソー研究・PP. 78, 79. なお、
対立表は主に『フランス百科全書の研究』と山上正太郎
著『フランスの歴史』によつた。各派の名称は私が勝手に
つけたものである。

むすび

ジャン・ゲーノは『対話』と『審判』との類似を発見した。それ
はたしかにすばらしい発見であつた。しかしすでに我々が見たよう
に、ルソーは、カフカのように沈黙の恐怖をそれ自体として表現し
ようとしたのではなかった。彼は、沈黙の恐怖を迫害の恐怖にすり

かえ、自らキリストの道を歩くことを選んだ。しかし、沈黙の中に迫害陰謀を読みとろうとしたことが、逆に『対話』に現実社会の基本的な動向を返し与えることになった。もちろんそれは、彼の出発点が沈黙の実感にあったからであることは言うまでもない。かくして、陰謀のイメージは、未来の担い手である進歩的階級と超未来的な理想家との矛盾の、そして後者を疎外していく時代の意志の表現となりえたのであった。そこにこそ『対話』の価値があるのではなからうか？ 二十世紀の今もこの矛盾は生きている。

『対話』がその完成された表現と言うのではない。それが完成された芸術作品となるためには、作家の側に用意が欠けすぎていた。つまり彼は、虚構としての真実であるべきものを、虚構であるとは絶対に認められなかった。それを認めることは彼の福音をも仮構とすることであつたのだ。事実としてルソーは眞人形に仕立てられ恥づかしめられたのでなければならなかった。その無理な願いが、『対話』を読む時、我々の最大の耳障りになる。我々がそれを虚構の真実として受けとるためには、作者の願いを一応しりぞけてかからねばならぬ。その時、我々は芸術を前にしているとは言えないだろう。むしろルソーにとっては、『対話』は芸術作品ではなく、陰謀告発と自己救済のための手段にすぎなかった。

劇『ピグマリオン』（一七六八—七〇）では、ルソーは自己と作品との関係を、芸術的に対象化することに成功していた。その能力をもつてすれば、『対話』でも同じことが行いえたはずだ。彼が『告白』の方法を否定した時、カフカのように新しい表現方法への道を歩いていたはずだった。しかし彼はあまりにも急にその道を折れ曲りすぎた。今日の観点から言えば、陰謀の恐怖を現実世界に何

らの媒介なしに直接密着させることによってではなく、陰謀のイメージを作品の世界の中での芸術的形象として完成させることによって、自己救済への望みを果たそうとしたのであれば、成々は文学史の中で傑作を一つ多く所有することになっていただろう。沈黙の恐怖を陰謀の恐怖にすりかえたことは、それ自体としては彼の弱さを示すものであつても、方法論としては、彼の願いをしりぞけさえすれば、決して間違つたことではなく、むしろ価値に転化するものであつたのだから。だが、全社会から疎外され、自己の思想からさえも疎外されざるをえなかつたルソーに、それを非難することはできない。老いた魂にとつて、陰謀の存在こそただ一つの慰めへの道であつたのだ。我々としては、この作品の芸術的な未完成にこそ、彼の全存在的な苦惱のしるしを見るべきではなからうか。

註一

ルソーはそれが無理であることを承知していたようだ。第二の対話で「ルソー」はこう言う。余私は、人々が専心して彼を取り巻いて、深い暗闇が彼に与えた不安な考えを、すべて現実であると言うのではない。……けれども、彼の度を過したファンタスティックな考えには、人々の彼に對する異常なやりくちから見て、真面目な検討に値するものがある。∴こうして彼は無理な願いを読者に納得させようとする推論をすすめるのだが、その方法自体には少しも無理はなく、彼の無理な願いは、こう書いている最中（傍点を施した部分）に無意識のうちにあらわれてしまうのだ。その部分を書かずにすれば、彼の方法はおそらく有効であつたろう。

OE, C., Dialogues, PP. 780, 781.

(註記)

監事OE. C., C. G. 著 全集 OEuvres Complètes de
J.-J. Rousseau, t. I, Bibliothèque de la Pléiade, 1595;
〈Correspondance〉 Générale de J.-J. Rousseau, Colin,
20vols, 1925—1934. 全10冊。